

〔研究資料〕

韓国青年（高校生）における剣道の捉え方に関する一考察 — 剣道がいやになる理由について —

金 炫 勇*
磨 井 祥 夫**

A research into how Korean youth, that is, high school students,
perceive Kendo: the reason for their loss of interest in Kendo

Kim Hyunyong

(A part-time instructor, Hiroshima University of Economics)

Sachio USUI

(Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University)

Abstract

As Kendo was included as a health and physical education subject in the 2007 Korean National Curriculum, it was expected that there would be an increase in the number of schools adopting Kendo as a physical education subject. However, in reality there has been a decrease in the number of schools teaching Kendo and a loss of interest in Kendo among Korean youth and this is a matter of much concern to the Korean Kendo world. Therefore, in this study we surveyed 310 high school students, both men and women, from schools in Seoul, Busan, Incheon, Gwangju, Taegu and Yongin in South Korea in order to discover the trends in their interest in, and attitude to, Kendo, their experience of it and their reasons for losing interest in it.

In summary, the results of this study are as follows:

1. The main reasons for the loss of interest in Kendo are these: There has been a decline in the attraction of Kendo for high school students. Kendo imposes restrictions on student lives. The ability of students to master Kendo is limited. These first two factors can be considered to be emotional ones and the third factor to be an inherent one, that is, from within Kendo itself.
2. No difference between men and women was evident.
3. In the case of talented Kendo athletes, it seemed that the possibility of not succeeding in contests and the possibility of being injured in a contest were significant social reasons for losing interest in Kendo.

From the above results, we have come to the conclusion that in order to counteract the decline in interest in Kendo among Korean youth we need to recognize the diverse interests that young people have today and that their interests must be enjoyable for them. Secondly, in the light of the crisis in job opportunities for skilled Kendo athletes, we must recognize the need to improve this environment and provide advancement opportunities and overcome the 'must win at all costs' attitudes among them.

* 広島経済大学非常勤講師

** 広島大学大学院総合科学研究科

I. はじめに

1. 「教育課程」体育科への剣道採用

韓国の初・中等教育段階の公教育においては日本と同様に国家カリキュラム制度が採択されており、初・中等教育法に基づき教育部長官（日本の文部科学大臣に相当）が告示する「教育課程」（日本の学習指導要領に相当）によって、教育内容および方法に関する全国的な基準が定められている（石川，2014，p.79）。戦後、韓国において剣道は1954年4月公布の「第1次教育課程」（日本の学習指導要領）から外されたものの、「2007年改訂教育課程」¹⁾から体育科（日本の保健体育科に相当）の一種目として採択された。

ここで、「教育課程」体育科における剣道の位置づけを簡単にまとめると次のようになる。体育科の内容体系が大きく変わったのは1997年2月告示の「第7次教育課程」からである。「第7次教育課程」の特性は従来初・中・高という学校段階によって分析されてきたカリキュラムに一貫性・連続性をもたせるべく、1～10学年（初1～高1）までの10年間を国民共通基本教育課程としたことである（石川，2014，p.81）。同教育課程によって体育科の内容体系も初・中・高を1～10学年に分けられ、初等学校の「体育科の領域」として体操活動、ゲーム活動、表現活動、保健、陸上活動（5年，6年のみ）、体力活動（5年，6年のみ）が、中学校と高等学校の「体育科の領域」としては体操、陸上、水泳、個人及び団体運動、舞踊、保健、体力運動、理論が示された。そして、格闘技種目としては、テコンドーとシルム（韓国相撲）だけが7年（中1）の個人及び団体運動として示された。「第7次教育課程」で導入された国民共通基本教育課程は、その後「2007年改訂教育課程」にも引き継がれた。ただし、「第7次教育課程」の体育科の内容体系では「領域」と「指導内容」だけが示されていたのに対し、「2007年改訂教育課程」では初・中・高の体育科の内容体系の大領域（健康活動、挑戦活動、競争活動、表現活動、余暇活動）、中領域、小領域、身体活

動の選択例が示され、より詳細化している。そして、剣道は中学校と高等学校の体育科の5つの大領域のうち、挑戦活動（標的及び闘技）の身体活動の選択例として示されている。

この5つの領域について、「2009年改訂教育課程」²⁾「タ。体育科で志向する5つの身体活動価値領域」²⁾は、「国内外の体育教育学界で一番普遍かつ一般的に認識されている価値を中心に5つの価値を示した。体育科が志向する5つの身体運動の価値は未来社会に備えて韓国人が揃えるべき核心力量（core competency）と関係がある。未来社会において要求される自己管理能力、対人関係能力及び市民意識、創意力及び問題解決能力などと関連する核心力量を含みながら、体育科の固有性を反映した代表的な価値領域が健康、挑戦、競争、表現、余暇である」と記している。そして、「2009年改訂教育課程」では、剣道が中学校から外れ、高等学校のみ選択例として示されている。この「挑戦活動の力点と内容構成」について、「2009年改訂教育課程」は「挑戦活動は個人の身体的優越性と他人の身体的器量に挑戦しながら自分の潜在能力を発見し、自分の限界に能動的に挑戦することができる能力の開発に焦点を当てる。挑戦の対象は記録挑戦、動作挑戦、標的及び闘技挑戦に区分する」³⁾と記している。

以上のように剣道が韓国の国家カリキュラムの中に位置づけられたことは大変意義あることであり、今後学校剣道の更なる普及・発展が期待できる。しかし、近年、私設剣道道場や社会体育センターの剣道講座に通う若者が急激に減り始め（登録公認道場数、2009年815、2010年786、2011年760）、経営破綻するところが続出している。そして若者の剣道離れは大きな課題となっている（大韓剣道会，2012，p.29）。

2. 先行研究の検討

韓国人の剣道に対する意識や実態に関する研究（井島ほか，2000；岩切ほか，2000；濱田ほか，2004；加藤，2009；安藤，2011；小田ほか，2012；小田ほか，2014）は、日本人と韓国人の剣道に対

する意識の差に焦点を絞ったものや、剣道の世界選手権大会における韓国チームの競技力の顕在化による韓国入選手の実態に焦点を絞った研究が主流を示している。これらの研究は日本社会において韓国の剣道事情があまり知られていない現状に着目し、韓国の剣道事情や実態を紹介したものである。しかし、これらはいずれも私設剣道場に通う剣道愛好家や競技選手（エリート剣道選手）を対象にしたものである。

一方、学校で剣道授業を受けた者（一般学生、体育特技生を含む）を対象にした研究に関しては、「韓国の青年における剣道の捉え方に関する研究：剣道の経験度による比較から」（金ほか、2011）、「韓国青年の剣道に対する意識に関する一考察：男女比較を中心に」（金ほか、2012）の中で取り上げられている。しかし、これらは剣道を続ける要因だけに焦点を当てている。したがって、今日の韓国剣道界の課題である若者の剣道離れ問題を考察するためには、剣道がいやになる理由を調べる必要がある。韓国青年を対象にした剣道がいやになる理由に関する研究は管見の限り見当たらない。

一般的に運動心理学では運動好き・運動嫌いは動機づけというテーマで研究されている。マレー（1966）や杉原（2003, p.116）によれば、「動機づけは一般的にホメオスタシス性動機、性的動機、情緒的動機、社会的動機、内発的動機に整理分類されている。これらのうち前4者は最後の内発的動機づけに対して外発的動機づけと呼ばれる。外発的動機づけとは、例えばお金のためにスポーツをするといったように、行動（運動）のほかに明確なかたちで外的な報酬（例えばお金）が存在し、外的報酬によって意欲が引き出される。これに対して、内発的動機づけとは従事する行動（運動）それ自体が報酬になり、その行動をすることが意欲を引き出すよう働く」ものである。そして、杉原（2003）は、運動嫌いを考察する際、動機づけに着目することは有効であると述べている。つまり、剣道がいやになる理由を考察する際にも動機づけ理論は有効であるといえる。

若者の剣道離れが日本の剣道界の大きな課題に

なった昭和60年代に、その改善策を探るため全国教育系大学剣道連盟研究部会（以下、全教剣）が行った調査研究（浅見、1993；木原、1993；草間、1993；松村、1993；角、1993；横山、1993）がある。日本青年（高校生と大学生）を対象に剣道をやめた理由といやな理由を調査した研究（浅見、1993）では、剣道をやめた理由といやな理由として「意欲・関心」「拘束性」「自己能力」が上位を占めている。これについて、浅見（1993, p.161）は「他への関心の移行と意欲の低下がもっとも大きいものであり、剣道に対して興味・関心の低下減少をくいとめることが最大の課題となっている。続いては剣道のもつ拘束性に対して強く否定しており、剣道漬けの生活を拒否していた。また、自分自身で限界を感じたことと、剣道に特有の『不快感について』の項目がやめた理由に強く影響している」と述べている。つまり、マレー（1966）や杉原（2003）の動機づけ分類によれば、日本青年は情緒的動機（意欲・関心、拘束性）や内発的動機（自己能力）が「剣道がいやになる理由」になっていると考えられる。

また、スポーツにおける男女のやる気になるきっかけを考察した杉原（2003, p.128）は、「男子では記録やプレーの上達、スポーツ独自の楽しさ、可能性への挑戦といった内発的動機づけが、女子では指導者や友達からの励ましが大きく関係している」と述べている。また、剣道に対する意識に関する研究においても男女の差（木原、1993；金ほか、2012）や経験度による差（草間、1993；金ほか、2011）が報告されている。また、日本青年の男子は自主的な活動の阻止、剣道具のよごれやにおい、剣道部の不在（転校、進学）、昇段審査が、女子は指導者不在、男女の差別、他の文化的な活動、指導内容の問題（レベルの高すぎ）、痛さ、病気・怪我が剣道をやめた理由・いやな理由として働いていたと報告されている（松村、1993）。剣道離れる者は、まず剣道がいやになり、それが積み重なって剣道から離れてしまうのではないかと考えられる。そのため、若者の剣道離れの理由を把握するためには、まず剣道がいやにな

る理由を調べる必要がある。

II. 研究目的

韓国青年における剣道の捉え方に着目した研究(金ほか, 2011; 金ほか, 2012)は男女の差や経験度の差があると報告している。また, 日本青年を対象に剣道をやめた理由・いやな理由を調べた研究では, 「意欲・関心の低下」「拘束性」「人間関係のもつれ」などが剣道をやめた理由・いやな理由の上位を示していると報告している(全教剣, 1993)。また, 体育授業と運動を嫌いにさせる要因を関連づけた研究(岡澤, 2000; 杉原, 2008)では, 運動学習者は外発的動機より内発的動機から運動をやめてしまう傾向があるとしている。これらのことより, 韓国青年における剣道がいやになる理由においても男女別および経験度別の差があり, 内発的動機が強く働いていることが予測される。そこで, 本研究では運動心理学の動機づけ理論を参考に, 韓国青年を対象に剣道がいやになる理由について, 全体の傾向及び男女・経験度別の差に注目し, 韓国青年の特性と課題を明らかにすることを目的とする。

III. 研究方法

1. 調査対象者

本研究では, 韓国のソウル, 釜山, 仁川, 光州, 大邱, 龍仁に在籍している高校生を対象者とした。調査総数 350 人から回答を得, 「未記入, 記入ミス等」を除外した 310 人を有効回答者(有効回答率 89%)として分析の対象とした。調査対象者の内訳は表 1 の通りである。

表 1 調査対象者の内訳

	性別		合計	
	男子	女子		
剣道経験度	一般学生*	114 人	99 人	213 人
	体育特技生	67 人	30 人	97 人
	合計	181 人	129 人	310 人

*: 一般学生は授業だけを受けた者を示す。

2. 調査内容

調査には, 若者の剣道離れが日本の剣道界の大きな課題になった昭和 60 年代, その改善策を探るために日本の全教剣により作成された調査票をもとに, 各項目を韓国語に訳した調査票を用いて行った。調査票は, 10 カテゴリーと 39 項目から構成されている。なお, 回答は 5 件法(「5. 直結している」「4. かなり関係がある」「3. 半分は関係している」「2. 少し関係がある」「1. 無関係である」とした。

近年, 韓国における私設剣道場の経営悪化の大きな原因の一つは, 若者の剣道離れである。私設道場で行われる剣道と学校で行われる剣道はその特性においては違うものの, 両方とも大韓剣道会の指導方針で行われており, その内容においては大きな違いはないと考えられる。

3. 調査方法

調査対象となった学校に調査依頼し, 学校長及び学生の同意を得て, 2006 年 9 月から 11 月までの期間に配票法により実施した。

4. 統計処理

統計処理は SPSS (17.0) を用いた。全体の傾向を調べるため, 10 カテゴリーの計 39 項目について, 平均得点と標準偏差を算出した。さらに, 男女及び剣道経験度の差を調べるため, 2 要因分散分析を行った。すべての検定の有意水準は 5% 未満とした。

5. 用語について

韓国における学校剣道は, 一般学生を対象にするものと剣道の体育特技生を対象にするものに分かれている。その定義を示すと以下のとおりである。

「学校剣道」は, 体育授業としての剣道と運動部活動としての剣道からなる。体育授業としての剣道は, 各学校の体育授業として取り扱われるものである。また, 運動部活動としての剣道は, 授業外の課外活動として有志により組織された剣道

部において取り組まれるもの（練習や大会参加など）である。一般学生は、「初・中等教育法」第2条および「高等教育法」第2条による学校（高等学校）に通う学生をいう。一般学生は、1年間週1回体育科において剣道授業を受けている。また、剣道の体育特技生は、体育特技生制度（大統領令第6377）に基づいて、学校の剣道部に所属し、「国民体育振興法」第33条と第34条が示す体育団体（大韓体育会）に登録され剣道選手として活動する学生をいう。体育特技生制度は、1962年に学校体育強化方案の一環として法令化された制度である。運動選手として優秀な技量を持った選手には、学業成績と関係なく、上級学校への進学機会を与える一貫したエリートスポーツ養成システムである。中学校・高等学校へ入学する体育特技生は、1996年まで国立教育評価院が審査して資格を与えたが（全国規模大会の入賞実績から審査）、1997年には廃止され、以後、大学が独自に選抜している。近年、厳しい就職率から剣道の体育特技生は減りつつあるのが現況である。

IV. 結果及び考察

1. 調査対象者の属性について

全教剣の調査における日本の対象者と本研究調査の韓国の対象者では経験度に異なる様相がみられた。例えば、日本青年は授業以外に同好会で定期的な剣道の経験ある者が15.9%示しているのに対して、韓国青年の一般学生の剣道経験は授業のみであった。また、剣道を始めた時期について、日本青年は小学校以前あるいは小学校で剣道を始めた者が約7割を示しているのに対して、韓国青年は剣道の体育特技生の場合でも中学校から剣道を始めた者が約7割を示している。この相違は日韓における学校剣道の普及の様相の相違を表していると考えられる。以上の限定条件下での比較考察であるため、結果の考察にあたっては十分に留意して進めることにした。

2. 剣道がいやになる理由—全体の傾向について

平均得点の高いカテゴリー順に結果を示すと表

2の通りである。カテゴリー別の平均は、「意欲・関心」「拘束性」「自己能力」「病気・怪我」「環境」「試合」「対人関係」「昇段審査」「指導法・内容」「不快感」の順に高かった。結果の考察については、日本青年を対象にした先行研究（浅見，1993）を参考にしながら、韓国青年（高校生）の特性を明らかにすることにした。浅見（1993）は、やめた者と継続者それぞれに剣道をやめた理由・いやな理由を調査している。本研究の対象は剣道授業を受けた者と剣道の体育特技生であるため、継続者として捉えて考察を進めることとした。

1) 意欲・関心について

日本青年は、「なんとなく剣道の練習に興味や意欲がわかなかった」「他のスポーツをしなくなった」「他の文化的活動をしなくなった」の順に高かったと報告されている（浅見，1993）。一方、韓国青年は、「他の文化的活動をしなくなった」（ 2.04 ± 1.31 ）、「なんとなく剣道の練習に興味や意欲がわかなかった」（ 2.03 ± 1.29 ）「他のスポーツをしなくなった」（ 1.91 ± 1.26 ）の順に高かった。

2) 拘束性について

日本青年は、「剣道に関わる時間が長く、他のことを行う時間が足りなかった」「練習を休むことが許されなかった」「精神力や根性が強調され、厳しいばかりであった」の順に高かったと報告されている（浅見，1993）。一方、韓国青年は、「剣道に関わる時間が長く、他のことを行う時間が足りなかった」（ 2.31 ± 1.48 ）、「精神力や根性が強調され、厳しいばかりであった」（ 1.70 ± 1.20 ）、「練習を休むことが許されなかった」（ 1.62 ± 1.14 ）の順に高かった。

3) 自己能力について

日本青年は、「自分の技能の伸びが止まって限界を感じた」「練習に体力がついていけなかった」「仲間や後輩たちより進歩・上達が遅れてしまった」の順に高かったと報告されている（浅見，1993）。韓国青年も、「自分の技能の伸びが止まって限界を感じた」（ 1.89 ± 1.23 ）、「練習に体力がついていけなかった」（ 1.75 ± 1.16 ）、「仲間や後輩たちより進歩・上達が遅れてしまった」（ 1.70 ± 1.11 ）

の順に高かった。

4) 病気・怪我について

日本青年は、「剣道が原因の病気・怪我が発生した」「剣道以外のことが原因の病気・怪我が発生した」の順に高かったと報告されている(浅見, 1993)。韓国青年も、「剣道が原因の病気・怪我が発生した」(1.69±1.13)、「剣道以外のことが原因の病気・怪我が発生した」(1.68±1.17)の順に高かった。

5) 環境について

日本青年は、「進学などのために勉強に取り組まなければならなかった」「剣道が続けるのにお金がかかりすぎた」「指導にあたる先生が配置されていなかった」「進学または転校したら、剣道部がなかった」「他の人から注目されることなく、マスコミも取り上げなかった」「家族の反対があった」の順に高かったと報告されている(浅見, 1993)。一方、韓国青年は、「進学などのために勉

表2 剣道がいやになる理由と各項目の得点(全体)

カテゴリー (10)	mean ± SD	項目 (39)	mean ± SD
意欲・関心	2.01 ± 1.01	他の文化的活動をしなくなった	2.04 ± 1.31
		なんとなく剣道の練習に興味や意欲がわかなかった	2.03 ± 1.29
		他のスポーツをしなくなった	1.91 ± 1.26
拘束性	1.88 ± 0.94	剣道に関わる時間が長く、他のことを行う時間が足りなかった	2.31 ± 1.48
		精神力や根性が強調され、厳しいばかりであった	1.70 ± 1.20
		練習を休むことが許されなかった	1.62 ± 1.14
自己能力	1.80 ± 0.92	自分の技能の伸びが止まって限界を感じた	1.89 ± 1.23
		練習に体力がついていけなかった	1.75 ± 1.16
		仲間や後輩たちより進歩・上達が遅れてしまった	1.70 ± 1.11
病気・怪我	1.72 ± 0.98	剣道が原因で病気・怪我が発生した	1.69 ± 1.13
		剣道以外のことが原因の病気・怪我が発生した	1.68 ± 1.17
環境	1.69 ± 0.63	進学などのために勉強に取り組まなければならなかった	2.11 ± 1.39
		剣道が続けるのにお金がかかりすぎた	1.91 ± 1.27
		指導にあたる先生が配置されなかった	1.70 ± 1.22
		他の人から注目されることなく、マスコミも取り上げなかった	1.54 ± 1.03
		進学または転校したら、剣道部がなかった	1.49 ± 1.11
試合	1.64 ± 0.97	家族の反対があった	1.43 ± 0.88
		試合に勝つことだけが追求されていた	1.67 ± 1.18
		試合の勝ち・負けの結果だけで自分を評価された	1.65 ± 1.15
対人関係	1.63 ± 0.86	審判の判定や規則について納得できなかった	1.54 ± 1.06
		指導者や先輩との上下関係が厳しかった	1.89 ± 1.38
		指導者の人柄や態度に問題があった	1.60 ± 1.17
		礼儀や挨拶などのしつけが強調されていた	1.59 ± 1.01
		同級生や仲間の人柄・態度に問題があった	1.55 ± 1.09
昇段審査	1.60 ± 0.97	OBや上級生の人柄・態度に問題があった	1.53 ± 1.07
		在学中に上の段位を受験できる機会がなかった	1.73 ± 1.31
指導者・指導内容	1.59 ± 0.76	昇段審査で不合格になった	1.45 ± 1.01
		いつも同じ指導内容の繰り返しだった	1.86 ± 1.27
		能力の高い者だけがひいきされていた	1.67 ± 1.17
		技術や練習方法について、納得できる説明がなかった	1.66 ± 1.08
		自主的な活動をやらせてもらえなかった	1.64 ± 1.11
		指導者から自分を認めてもらえなかった	1.61 ± 1.14
		叱られてばかりいて、褒められることが少なかった	1.57 ± 1.14
		雑用や掃除を多くやらされた	1.73 ± 1.35
		指導者の要求レベルが高すぎて、ついていけなかった	1.49 ± 0.87
指導者が防具をつけず、練習を一緒にしなかった	1.43 ± 0.95		
不快感	1.51 ± 0.88	練習で男女の差別があった	1.37 ± 0.89
		剣道具の汚れや臭いが我慢できなかった	1.52 ± 0.98
		打たれたときの痛みが我慢できなかった	1.49 ± 0.97

強に取り組まなければならなかった」(2.11±1.39), 「剣道を続けるのにお金がかかりすぎた」(1.91±1.27), 「指導にあたる先生が配置されていなかった」(1.70±1.22), 「他の人から注目されることなく、マスコミも取り上げなかった」(1.54±1.03), 「進学または転校したら、剣道部がなかった」(1.49±1.11), 「家族の反対があった」(1.43±0.88) の順に高かった。

6) 試合について

日本青年は、「試合の勝ち・負けの結果だけで自分を評価された」「試合に勝つことだけが追求されていた」「審判の判定や規則について納得できなかった」の順に高かったと報告されている(浅見, 1993)。韓国青年も、「試合に勝つことだけが追求されていた」(1.67±1.18), 「試合の勝ち・負けの結果だけで自分を評価された」(1.65±1.15), 「審判の判定や規則について納得できなかった」(1.54±1.06) の順に高かった。

7) 対人関係について

日本青年は、「指導者や先輩との上下関係が厳しかった」「指導者の人柄や態度に問題があった」「OBや上級生の人柄・態度に問題があった」「同級生や仲間の人柄・態度に問題があった」「礼儀や挨拶などのしつけが強調されていた」の順に高かったと報告されている(浅見, 1993)。一方、韓国青年は、「指導者や先輩との上下関係が厳しかった」(1.89±1.38), 「指導者の人柄や態度に問題があった」(1.60±1.17), 「礼儀や挨拶などのしつけが強調されていた」(1.59±1.01), 「同級生や仲間の人柄・態度に問題があった」(1.55±1.09), 「OBや上級生の人柄・態度に問題があった」(1.53±1.07) の順に高かった。

8) 昇段審査について

日本青年は、「昇段審査で不合格になった」「在学中に上の段位を受験できる機会がなかった」の順に高かったと報告されている(浅見, 1993)。一方、韓国青年は、「在学中に上の段位を受験できる機会がなかった」(1.73±1.31), 「昇段審査で不合格になった」(1.45±1.01) の順に高かった。

9) 指導法・指導内容について

日本青年は、「いつも同じ練習内容の繰り返しだった」「能力の高い者だけがひいきされていた」「叱られてばかりいて、褒められることが少なかった」「指導者の要求レベルが高すぎて、ついていけなかった」「指導者から自分を認めてもらえなかった」「技術や練習方法について、納得できる説明がなかった」「自主的な活動をやらせてもらえなかった」「雑用や掃除を多くやられた」「指導者が防具をつけず、練習を一緒にしなかった」「練習で男女の差別があった」の順に高かったと報告されている(浅見, 1993)。一方、韓国青年は、「いつも同じ練習内容の繰り返しだった」(1.86±1.27), 「能力の高い者だけがひいきされていた」(1.67±1.17), 「技術や練習方法について、納得できる説明がなかった」(1.66±1.08), 「自主的な活動をやらせてもらえなかった」(1.64±1.11), 「指導者から自分を認めてもらえなかった」(1.61±1.14), 「叱られてばかりいて、褒められることが少なかった」(1.57±1.14), 「雑用や掃除を多くやられた」(1.73±1.35), 「指導者の要求レベルが高すぎて、ついていけなかった」(1.49±0.87), 「指導者が防具をつけず、練習を一緒にしなかった」(1.43±0.95), 「練習で男女の差別があった」(1.37±0.89) の順に高かった。

10) 不快感について

日本青年は、「剣道具の汚れや臭いが我慢できなかった」「打たれたときの痛みが我慢できなかった」の順に高かったと報告されている(浅見, 1993)。韓国青年も、「剣道具の汚れや臭いが我慢できなかった」(1.52±0.98), 「打たれたときの痛みが我慢できなかった」(1.49±0.97) の順に高かった。

浅見(1993, pp.161-162)は、日本青年(全体)の剣道がいやになる理由について、「拘束感に対する否定がもっとも強かった。つづいて本人自身の意欲の低下と他への関心の移動となっており、これらのことから、剣道漬けの日々からは逃げだしたい、他のことをしたいと思いつつも剣道を継続しているということがわかった。この他には、技能・体力の限界を感じたときや厳しさだけの練

習、それに剣道が原因の故障、勝ち負けの結果による評価を受けたときがいやな理由の上位に上がっていた」と報告している。

本研究の結果も同様であり、韓国青年（高校生）も意欲・関心の低下、剣道のもつ拘束性、自己能力の限界、剣道による病気・怪我がいやな理由の上位を示していた。情緒的動機（意欲・関心、拘束性）がいやな理由の上位を示していることについて、浅見（1993, p.162）は、剣道を人間形成の道として捉え、その価値や魅力を注入する従来の教育剣道では未経験者や若者がついていけないと指摘した上、スポーツ剣道として多様な追求や楽しみ方を容認することを提案している。また、剣道だけに拘束される剣道漬けの生活は意欲の低下につながるとし、剣道漬けを強いることは避けるべきであると述べている。運動心理学によると、楽しい、面白い、多様な追求に代表される快の情緒は接近動機として働くものである。一方、快の情緒が満たされないと不快の情緒が生じ、回避動機として働くものである（杉原, 2003, p.122）。今回の結果はこの理論を裏付けるものであり、剣道授業においてもその特性を生かした授業づくりが求められることが示唆された。

3. 剣道がいやになる理由—男女及び経験度について

カテゴリーごとに男女及び経験度（一般学生と剣道の体育特技生）の差を検討するために、2要因分散分析を行った結果、「意欲・関心」「拘束性」「自己能力」「対人関係」「指導法・指導内容」「不快感」に男女及び経験度の有意な差は認められなかった。一方、「環境」「試合」「病気・怪我」「昇段審査」では経験度間に有意な差が認められた。本研究では有意な差が認められたカテゴリーを中心に考察した。その結果を示すと図1のとおりである。

1) 環境について

このカテゴリーに関する質問としては、「進学などのために勉強に取り込まなければならなかった」「剣道を続けるのにお金がかかりすぎた」「指

導にあたる先生が配置されていなかった」「他の人から注目されることなく、マスコミも取り上げなかった」「進学または転校したら、剣道部がなかった」「家族の反対があった」という6つの項目があった。2要因分散分析を行った結果、男女間に有意な差は認められず、男女と剣道経験者間の交互作用も有意ではなかった。しかし、剣道経験度間に有意な差 ($p=0.00$) が認められた。

2) 試合について

このカテゴリーに関する質問としては、「試合に勝つことだけが追求されていた」「試合の勝ち・負けの結果だけで自分を評価された」「審判の判定や規則について納得できなかった」という3つの項目があった。2要因分散分析を行った結果、男女間に有意な差は認められず、男女と剣道経験者間の交互作用も有意ではなかった。しかし、剣道経験度間に有意な差 ($p=0.02$) が認められた。

3) 病気・怪我について

このカテゴリーに関する質問としては、「剣道が原因で病気・怪我が発生した」「剣道以外のことが原因の病気・怪我が発生した」という2つの項目があった。2要因分散分析を行った結果、男女間に有意な差は認められず、男女と剣道経験者間の交互作用も有意ではなかった。しかし、剣道経験度間に有意な差 ($p=0.05$) が認められた。

4) 昇段審査について

このカテゴリーに関する質問としては、「在学中に上の段位を受験できる機会がなかった」「昇段審査で不合格になった」という2つの項目があった。2要因分散分析を行った結果、男女間に有意な差は認められず、男女と剣道経験者間の交互作用も有意ではなかった。しかし、剣道経験度間に有意な差 ($p=0.00$) が認められた。

日本青年の男女の剣道がいやな理由を尋ねる先行研究（松村, 1993）では男女差が報告されていたため、本研究においても韓国青年の男女の間には差があると想定したものの、有意な差はみられなかった。松村（1993, p.179）は、日本青年の「いやな理由」での男女の特徴について、『「剣道具のよごれやにおいががまんできなかった』と『剣道

以外のことが原因の病気・怪我が発生した』、『他の人から注目されることなく、マスコミも取り上げなかった』、『指導者の人柄や態度に問題があった』の4項目が男子の特徴を示し、『指導者から自分を認められなかった』と『仲間や先輩よりも進歩・上達がおくれてしまった』、『自分の技能の伸びがとまって限界を感じた』、『練習で男女の差別があった』、『他の文化的な活動をしなくなった』、『指導者にあたる先生が配置されていなかった』、『能力の高い者だけがひいきされていた』の7項目が女子の特徴を示していた」と述べている。しかし、松村(1993)は、男女差が出た理由については言及していない。また、検定をしたわけではないため、統計的に有意な差であるかは不明である。本研究の結果から、やる気になる理由については、男女差があるとしても、いやになる理由については、男女差がないことが示唆された。

一方、「環境」「試合」「病気・怪我」「昇段審査」

の 카테고리では経験度間にのみ有意な差が認められた。本研究では剣道授業だけを受けた一般学生と剣道の体育特技生(97人, 31.3%)を比較している。周知のとおり、韓国の高校生を取り巻く熾烈な大学入試は大きな社会問題になっている。また、剣道の体育特技生を取り巻く環境も指摘されている。韓国の体育特技生の現状と課題について、安(2011, p.10)や尹(2011, p.15)は「大会入賞成績が上級学校へ進学するための手段として認識されており、大会でメダル獲得のために授業軽視、指導者の選手に暴力や怪我などが深刻な問題を引き起こしている」と指摘している。このように、剣道の体育特技生を含む韓国青年の特性として、過剰な勝利至上主義によって剣道をいやになることが考えられる。そして、「環境」では、高校生を取り巻く熾烈な大学入試が、剣道がいやになる理由として働いていたことが考えられる。また、剣道の体育特技生の場合は、金銭的な問題

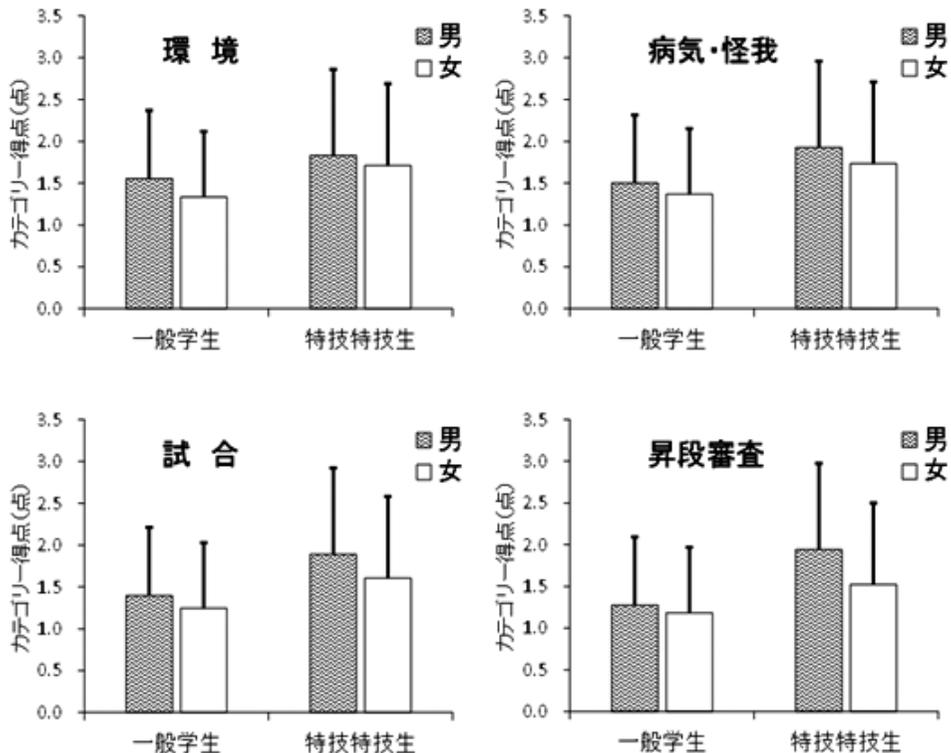


図1 剣道がいやになる理由のカテゴリ得点（男女別及び経験度別）

やマスコミが他のスポーツに比べ剣道を取り上げないことが、剣道がいやになる理由として働いていたことが考えられる。そして、「試合」では、進学のためには全国大会3位入賞以上（個人、団体）の結果が求められる剣道の体育特技生を取り巻く勝利至上主義という環境が影響を与えたと考えられる。そして、「病気・怪我」でも、勝利至上主義から病気や怪我が多いと考えられる剣道の体育特技生特有の問題が影響を与えたと考えられる。また、「昇段審査」でも、在学中に上の段位を受験できなかった剣道の体育特技生の考え方が反映されていると考えられる。大韓剣道会「昇段及び称号審査規定」第11條「審査資格の制限」によれば（大韓剣道会，2003，p.446）、「審査資格の制限②国際大会に入賞し国威宣揚に寄与した者」以外は、昇段審査に所定の期間と制限年齢を定めている。以上のように、有意な差が認められたカテゴリーにおいて、剣道の体育特技生の影響が大であったと考えられる。

一方、「意欲・関心」「拘束性」「自己能力」「対人関係」「指導法・指導内容」「不快感」というカテゴリーでは男女及び経験度の有意な差は認められなかった。日本青年を対象にした先行研究においても情緒的動機（意欲・関心、拘束性）、内発的動機（自己能力）、社会的動機（対人関係）などが剣道経験者全体のいやな理由の主要因になっている（全教剣，1993）。つまり、これらのカテゴリーは男女及び経験度に関係なく、若者の剣道経験者全体に共通する剣道をいやになる理由として働いている可能性が示唆された。

V. まとめ

「2007年改訂教育課程」（韓国の国家カリキュラム）から剣道が体育科の種目として採用され、剣道を体育授業として採用する学校の増加が大いに期待される。しかし、近年韓国の剣道界では若者の剣道離れが大きな課題になっている。そこで、本研究では、韓国のソウル、釜山、仁川、光州、大邱、龍仁に在籍している高校生310人を対象に剣道がいやになる理由について、全体の傾向及び

男女・経験度別の差に注目し、韓国青年の特性と課題を明らかにしようとした。その結果をまとめると以下の通りである。

1. 韓国青年（高校生）において、意欲・関心の低下、剣道のもつ拘束性、自己能力の限界などが、剣道をいやになる主な理由として働いていた。すなわち、情緒的動機（意欲・関心、拘束性）や内発的動機（自己能力）が、剣道をいやになる理由になることが示唆された。
2. 韓国青年（高校生）において、男女の間には差が認められなかった。つまり、剣道をいやになる理由では男女の差がないことが示唆された。
3. 経験度別にみると、韓国青年（高校生）において「環境」「試合」「病気・怪我」「昇段審査」の4つのカテゴリーで差が認められた。つまり、剣道の体育特技生の場合は、彼らを取り巻く環境（狭い進学先と勝利至上主義による病気・怪我）、つまり社会的動機が、剣道をいやになる理由になることが示唆された。

以上の結果から、韓国青年（高校生）の剣道離れを改善するためには、若者の多様性追及や楽しみ中心の趣向を容認する指導内容にする必要があると考えられる。また、近年、厳しい就職難から剣道の体育特技生が急激に減っている現状を考えると、体育特技生を取り巻く環境を改善することが急務であると考えられる。

註

- 1) 韓国では1954年4月公布の第1次教育課程から1997年2月告示の第7次教育課程までおよそ7～10年サイクルで全面改訂が行われてきたが、第7次教育課程以降は加速する時代変化に合わせて適宜国家カリキュラムの内容を革新していくために、第7次教育課程を基礎としつつこれに補完・修正を加えていく随時改訂体制が導入された。第7次教育課程以降これまで、新旧の区分がなされるほどの大きな改訂は

2007年2月と2009年12月の2回行われている。これらの教育課程は従前のような回数ではなく改訂年を冠して、それぞれ「2007年改訂教育課程」「2009年改訂教育課程」と呼ばれている（石川，2014）。各教育課程は国家教育課程情報センター（<http://ncic.kice.re.kr/>）から見られる。「2007年改訂教育課程」は「2009年改訂教育課程」によって部分改訂され、2013年度から実施されている。

- 2) 2009年改訂教育課程「タ. 体育科で志向する五つの身体活動価値領域」は国家教育課程情報センター. <http://ncic.kice.re.kr/> から見られる。筆者が日本語訳した。
- 3) 2009年改訂教育課程「タ. 体育科で志向する五つの身体活動価値領域」〔〈表1〉身体活動の価値と内容領域〕に示された挑戦活動を筆者が日本語訳した。

文献

- 安藤亜紀（2011）韓国における学生剣道に関する研究. 平成22年度金沢大学教育学部スポーツ科学課程卒業論文.
- 安敏錫（2011）韓国のスポーツ政策とコーチング・システム. 日本コーチング学会第22回大会・日本体育学会体育方法専門分科会研究会. 9-10.
- 浅見裕（1993）青年の剣道に対する意識：「剣道経験者全体」について—剣道経験者全体のやめた理由といやな理由の順位—. 全国教育系大学剣道連盟研究部会. pp.150-164.
- 濱田臣二・鶴林幸喜・李種坦・許光洙・権會奉（2004）日韓剣道実践者のスポーツ価値志向に関する比較研究. 北九州工業高等専門学校研究報告. 119-124.
- 尹相俊（2011）専門用語の基本概念と日本語訳のニュアンスの異同について. 日本コーチング学会第22回大会・日本体育学会体育方法専門分科会研究会. 15.
- 井島章・岩切公治・井上哲郎・朴東哲（2000）韓国における剣道の意識調査：韓国及び日本の大學生を比較して. 国際武道大学研究紀要, 16：191-196.
- 岩切公治・井島章・井上哲郎・朴東哲（2000）韓国における剣道の実態調査. 国際武道大学研究紀要, 16：213-217.
- 石川裕之（2014）韓国における国家カリキュラムの革新とグローバル化. 教育学研究. 第81巻（2）：214-225.
- 加藤純一（2009）韓国から見た剣道の国際化. 日本武道学会剣道専門分科会報：ESPRIT2008年度版, 17-18.
- 木原資裕（1993）青年の剣道に対する意識：男女について. 全国教育系大学剣道連盟研究部会. pp.29-52.
- 金炫勇（2010）韓国剣道ナショナルチーム選手の剣道に対する意識. 広島大学大学院教育学研究科紀要. 第二部（59）：345-352.
- 金炫勇, 草間益良夫（2011）韓国の青年における剣道の捉え方に関する研究：剣道の経験度による比較から. 広島体育学研究. 37：1-10.
- 金炫勇, 高田康史（2012）韓国青年の剣道に対する意識に関する一考察：男女比較を中心に. 武道学研究. 第45巻（1）：57-69.
- 金炫勇（2014）韓国における剣道の導入期に関する一考察. 武道学研究. 第46巻（2）：87-98. 国家教育課程情報センター. <http://ncic.kice.re.kr/>
- 草間益良夫（1993）青年の剣道に対する意識：「全体」について. 全国教育系大学剣道連盟研究部会. pp.13-28.
- マレー E.・八木晃訳（1966）動機と情緒. 岩波書店
- 松村司郎（1993）青年の剣道に対する意識：「剣道経験者男・女」について—やめた理由といやな理由で男女の特性と傾向—. 全国教育系大学剣道連盟研究部会. pp.167-181.
- 小田佳子, 近藤良享（2012）日本剣道 KENDO の国際発展への課題—韓国剣道との相克を中心に—. 体育・スポーツ哲学研究. 34(2)：125-140.

- 小田佳子, 恵土孝吉, 朴東哲, 井上哲郎, 三苦保久 (2014) 国際化に伴う剣道の価値に関する研究—日本剣道 KENDO と韓国剣道 KUMDO の大学生選手の比較から—, 武道学研究, 第47巻別冊: 59.
- 岡澤祥訓 (2000) 生涯体育・スポーツの実践者の育成を目指した体育授業, タイムス, pp.273-289.
- 大塚忠義 (1993) 青年の剣道に対する意識: 高校生と大学生について—剣道をやめた理由といやになった理由とは何か—, 全国教育系大学剣道連盟研究部会, pp.186-197.
- 杉原隆 (2008) 運動指導の心理学—運動学習とモチベーションからの接近—, 大修館書店, 154-161.
- 角正武 (1993) 青年の剣道に対する意識—「剣道経験者高校生男・女」について—, 全国教育系大学剣道連盟研究部会, pp.201-210.
- 横山直也 (1993) 青年の剣道に対する意識—「剣道経験者大学生男・女」について—, 全国教育系大学剣道連盟研究部会, pp.211-225.
- 全国教育系大学剣道連盟研究部会 (1993) 青年の剣道に対する意識—高校生・大学生を対象として—, 全国教育系大学剣道連盟研究部会.
- 全国学校情報公示システム (学校アルリミ), <http://www.schoolinfo.go.kr/>